

かけはし

K A K E H A S H I

今号裏面は、
「副看護師長としてのご挨拶」
です



医療福祉支援センター長
小林 利彦

5年後・10年後の附属病院を見てみたい・・・

新型コロナウイルス感染症の終焉にはもう少し時間がかかりそうですが、世の中は確実に変化しています。厚生労働省等からの最近の刊行物を読んでも、団塊の世代が後期高齢者となる2025年という時間軸が、最近では高齢人口ですら減り始める2040年に、そして日本の人口が1億人を切る2050年を目標年にした論調が増えています。

私自身、人口が1億人を切る2050年に生きているとは思えませんが、大学人としての生活も残りわずかとなり、今は感慨深いものがあるとともに、次のライフステージで何を考えることが多くなりました。一方、浜松医科大学医学部附属病院においては、この2-3年の間に大きなうねりを迎えることが予想されています。具体的には、ハード面において、来年早々から新しい病棟での診療機能が追加されます。今回の建物は、外来棟と入院棟に隣接する形で地上4階・地下1階の建造物となりますが、診療機能としては、周産母子センター[NICU・GCU] (4階)、内視鏡センター[光学医療診療部] (3階)、外来化学療法センター[化学療法部]・放射線治療外来 (2階)、手術室 (1階)、放射線治療部門[リニアック治療室・治療計画CT室・ラルス治療室] (地下1階) などがあります。なお、私達、医療福祉支援センターのスタッフが中心となり、多機能な業務およびサービス等を展開するフロア(メディカル・サポート・エリア)も2階に設置されます。ちなみに、新しい建物の名称は、職員からの投票により「先端医療センター(aMec)」と決まりました。

そのほか、災害医療を想定したトリアージスペースとしての建物も年内に完成する予定です。また、613床ある入院病棟にもHCUが4床増設される方向での計画が現在進んでいます。さらに、病棟内の診療科等を含む再編成計画も動き始めています。例えば、私自身、今の入院病棟が出来上がった折に附属病院の副院長を拝命していましたが、2009年末に旧病棟から新入院棟への患者搬送を仕切ったことが、ついこの前のことのように思い出されます。なお、その翌年からは外来再整備計画が始まり、電子カルテの本格的導入なども含め病院の執行部に席を置いていましたが、2012年に現在の医療福祉支援センターへと異動となり管理職の役は終わりました。当時は、病院経営面での立て直しなどを含め無我夢中で行動していましたので、正直、附属病院の激動の時代を振り返る余裕もなかったのですが、これからの数年も同様に、本大学病院にとって大きな転換期となるような気がします。

私自身、先端医療センター(aMec)の門出は目の当たりにできませんが、その後の附属病院の行く末を現場で体験することはできません。ただ、私自身が医療福祉支援センターに初めて関わった2004年当時に比べれば、関係するスタッフも多くなり経験値も増しています。きっと、新しい世代のスタッフが、この附属病院の中で色々活躍してくれるだろうと期待しています。私の希望としては、このあと5年後・10年後に、患者としてではなく(笑)、この附属病院を改めて訪れてみたいというのがあります。たぶん、その頃には、この大学病院だけでなく、世の中の風景も大きく変わっていることでしょうが・・・

医療福祉支援センター長 小林利彦